希望を耕す

現場めし

早稲田大学 研究院教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

帯同シェフの存在感

お名前を失念してしまったが、スケート・ボードの世界選手権でメダルを獲得した若い女子選手が、国際試合で世界を転々とするなか、ちょくちょく荷物が重くなりすぎる失敗があると話していた。

その時持っていた荷物を開いて見せてくれていたが、彼女がかなりの量の米を持ち歩いているのには少々驚かされた。しかし、よくよく考えてみると、アスリートにとって体調管理は一丁目一番地。日頃の主食であり、海外では手に入りにくい日本の米を持ち歩きたくなるのは、当然と言えば当然の気持ちであろう。

ところで、世界で活躍するアスリートと言えば、去る九月から十月にかけてフランスで開催された第一〇回ラグビー・ワールド・カップが真っ先に思い出される。日本代表がベスト・エイトに駒を進められなかったのは残念だったが、世界の強豪国に伍して戦うその姿のお陰で、私のような俄かラグビー・ファンも含めて大いに盛り上がった。

その少し前、七月から八月にかけては、女子サッカーのワールド・カップがオーストラリアとニュージーランドで開催され、なでしこジャパンは予選グループでザンビア、コスタリカ、スペインに見事勝利、決勝トーナメントではノルウェーを下してベスト・エイトになった。五ゴールを上げた宮澤ひなた選手は得点王に輝いた。

この夏から秋にかけて日本を熱狂させたラグビー日本代表となでしこジャパン。二つに共通した意外なものがある。それは帯同したシェフ、西芳照さんの存在だ。

両チームとも、TVニュースの現地報告で、西シェフの帯同が話題になっていた。どこかで見たシェフだなと思ったら、長年サッカー日本代表の専属シェフを務めてこられた、あの西さんだとのこと。両方の現地報告とともに、食堂での選手たちの生の声が茶の間に届けられていたが、どの選手も西さんの腕と人柄、大絶賛だった。

「コミュニティ大工」の条件

美味しい食事や食べ慣れた食事は、人をあっという間に幸せな気分にできるし、いともたやすく緊張の糸をほぐしてくれたりもする。そのうえ、明日の身体やエネルギーの源でもあるのだから、決して軽んずることはできない。

食事で思い出すのは、私が今注目している鹿児島の「コミュニティ大工」加藤潤さんの現場。

「コミュニティ大工」とは、一般の大工と同じような修業過程こそ経ていないものの、DIYによる空き家再生などの経験を積み重ねることで腕を磨き、空き家の再生であれば一通りの大工仕事も現場のマネジメントもできるようになった人のことで、一般の大工ができないような工事以前の不動産の取引や各種の届出などの業務ができ、更には施主を含む一般の人の施工参加を促し、建物と人との豊かな関係を生み出すとともに、プロジェクトの関係人口をも増やしていくような人である。とりわけ、施主とその友人たちや近所の人たちの施工参加を促し、その人たちにやり甲斐や満足感をもたらす施工現場のマネジメント力は半端なものではなく、そこには高いレベルの人間力が求められる。

そんなコミュニティ大工の現場にお邪魔してみると、「毎日の昼食やおやつの時間が楽しみでこの現場に通っています」という人が多いことに気付かされる。ここでも「食」は大事なもの、大事な時間なのである。コミュニティ大工の人間力には、西シェフにも通じる美味しい食事を振る舞える力が含まれており、実際「加藤潤さんの振る舞う料理は美味い」らしい。笑顔のあふれる現場めしの写真からでもそのことは伝わってくる。

「コミュニティ大工」加藤潤さんの現場。参加者全員で楽しむ昼食の風景
（写真：加藤潤氏）

家普請の食事

この光景から、以前富山のあるベテラン大工の方が語ってくださった戦前の家普請、そこでの食事のことを思い出した。当時は得意筋の仕事をする時には、大工たち職人は、その家の者になり、得意筋の家紋の入った半纏を身にまとい、三食すべてその家でご馳走になったというのである。

夕食を食べて家に帰る時には、その家の奥さんに「行ってきます」と挨拶し、朝現場に入る時には「ただいま」と挨拶したらしいから、工事期間中はまさに「その家の者」になっていたのだろう。

夕食時には大人の職人にはお銚子が二本つき、まだ若い見習さんたちには、休みの前の日に奥さんが「これで遊んでおいで」と小遣い銭をくださったという。この話から綺麗な奥さんの指揮の下、女中さんたちが運んでくる食事の絵が頭に浮かぶが、それはさぞ美味かったろうと思う。

楽しく豊かな現場の原点は「食」にあり。世界で戦うアスリートたちも、建築や土木の工事現場で働く監督さんや職人さんたちもそれは同じである。